

氷華集

2025年5月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

街路樹に地衣のくきやか春の雨	齋藤亜矢
菰ぬちに斑ら日の揺れ冬牡丹	朝田玲子
春の宵あしたの雨の匂ひとも	小 瀧 和
うりずんや鍋一面のゆし豆腐	大石高典
雪沓の田の面を駆くるランドセル	福江ちえり
歯の抜けし子の駆け出しぬ風車	鈴木大輔
新雪や蹄二の字の跡を追ひ	福のり子
初蝶や遠くに光る吉野川	田中白秋
恋すてふ我が名は猫よ春の風	川村純子
清水の舞台や春の雪しまく	谷口文子
寒泉や三つ二つと泡を生み	加藤 剛
春立つや両隣よりカレーの香	有岡萃生
あぜ道に息青みけり水の春	牧田満知子
馬車道の松や離宮の風冴ゆる	片山旭星
春一番空にはりつく島の鳥	片岡和子
岩海苔や能登の隆起の岩場にも	中井昭雄
碧天へ円周ひろげ春の鳶	津嘉山典
卒業の娘の袴かかる部屋	碓氷芳雄
声高く数へて百のふきのたう	伊東弥生

氷室集

冬の浜拾ひし貝に風の音

加藤広文

立春やきのふの豆に雀の来

小畠和

吹きさらしの地に苗札のゆるぎなく

朝田玲子

亡き人は亡き人のまま梅白し

鈴木大輔

コート買ふ名のみの春を待ちきれず

福のり子

あたたかや懷紙にほどくこぼれ梅

牧田満知子

風花や手に熱すぎるココア缶

宮坂美緒

冬空の青し真白き比良の峰

片山旭星

源氏より平家が好きと春三日月

河村純子

白息や記憶の奥の大地震

寺川貴也

入学や楡の大枝天を指す

坂岡隆司

科学研究費の皮算用二月尽

大石高典

早春や山鳩は喉ふくらませ

谷口文子

収穫の港脈はふ若布かな

田中勝

雪解水飲む猫のゐて日の高し

昌山瑠美子

水灌菜富士の恵みといただきぬ

丹羽康夫

大阪に残る寒さのはや五日

加藤剛

涅槃図に猫をらぬわけ通訳す

有岡萃生

立春や鬼のパンツを繕ひぬ

伊東弥生

春雨の傘をくると金曜日

石上敦子

氷華集

2025年4月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

御降りのしみゆく能登の土赤し	福江ちえり
冬三日月きりりと疼く胸の傷	福のり子
阿豆流為の首あると言ふ冬日向	有岡萃生
寒暁や簞笥の揺れの記憶あり	加藤 剛
淑気満つ横たふ馬の深軒	朝田玲子
初旅の雲低くなり重くなり	小 篤 和
万両の赤や離宮の空広し	田中白秋
翁飾そこに年明け能舞台	河村純子
家なれどいつもと違ふ雑煮かな	齋藤亜矢
箸紙や欠けることなく名を連ね	谷口文子
初旅やうちなんちゆうの温かき	大石高典
をちの灯の小さく大きく冬の波	牧田満知子
牡蠣小屋の音や待ちゐる家族連れ	田中 勝
冬深し象舎に象の籠りゐる	碓氷芳雄
鯛焼や散歩がてらに寄る屋台	中井昭雄
爛酒を酌む後書を読み終へて	片山旭星
狐面の稽古を重ね里神楽	富沢壽勇

冬麗の月を残して星去りぬ

津嘉山典

恵比須大黒大漁の初神楽

丹羽康夫

氷室集

氷見沖へ鳶の出てゆく冬日和

福江ちえり

裸木の凜と立つとき阿修羅めく

福のり子

台湾やランタンの絵の初電車

小嶌 和

枯芝の光に埋もれ猫は野良

朝田玲子

なかなかに鳴らぬ指笛虎落笛

大石高典

海鼠ひよいと袋へ収め露店商

鳥居裕子

去年今年味濃くなりし中味汁

福田将矢

鮫鰯の肝買ひ酒をまた買ひぬ

鈴木大輔

寒晴や母の在せば鶴折らむ

加藤広文

寒禽や土塀の続く宿場町

牧田満知子

書初の一画どれも尻上がり

有岡萃生

幼な児のつぶやきをメモ春隣

伊東弥生

たたなづく青垣かくし時雨雲

津嘉山典

寒風に耐へたる幹の細きかな

加藤 剛

熱の身の馳走はこれぞ昼の雪

河村純子

飲み頃に炭酸効かせ年始酒

丹羽康夫

やんばるの島の野生のみかんとや

昌山瑠美子

山眠る杉の木立は色淡し

片山旭星

小正月と留学生におぜんざい
母いつもの手際のよさや七日粥

谷口文子
宮坂美緒

氷華集

2025年3月の雑詠から尾池和夫抄出

寒月と声交し合ひ一人旅

氷壺集

束の間の夕日や小歩危駅の冬

福のり子

しはぶきはコソコソと言ふ森の民

小寫 和

おかば煮る冬至の習ひ婆ちゃん子

大石高典

冬日射す父の亡骸母に寄せ

中島冬子

夕暮の町や鼬が辻に消ゆ

加藤 剛

夜鳴蕎麦その辻あたり曲がり来よ

齋藤亜矢

消えかかる措辞追ふ朝の蒲団かな

有岡萃生

山門を出ればこの世の天高し

朝田玲子

爆弾を箸に真二つ関東煮

田中白秋

冬の夜や遺品となりし馬上杯

福江ちえり

冬の夜や少し安堵の脈を取る

片山旭星

核検査室鉄扉なり凍つる朝

河村純子

底冷や地に十字切る無言館

牧田満知子

望遠鏡に踏台を置き冬銀河

富沢壽勇

森川恵美子

牡蠣剥くや波形の殻へナイフの背

鈴木大輔

夫へ入浴介助を受けて冬至の湯

大野千鶴子

春待つやオスロの夜の平和賞

田中 勝

肖像画のモデルに老いの秋思かな

植田清子

氷室集

登校の子は見逃さず初氷

朝田玲子

枯菊を焚く「高砂」を謡ひつつ

加藤広文

いくたびとなく降り来たり木の葉雨

加藤 剛

水鳥の群れゐる塩田跡地とや

小 瀧 和

足跡を追ひつ逃しつ雪の獺

昌山瑠美子

おかへりと言ひ合ふけふのおでんかな

鈴木大輔

江戸普請四谷塩町寒の雨

牧田満知子

笈摺のうしろ姿や初しぐれ

田中白秋

寄鍋の湯気の向かうや父百歳

河村純子

犬の尾のゆらと飛びだす芒原

宮坂美緒

文旦をいただく仲となりにけり

有岡萃生

木版の二色に刷るも悴みて

谷口文子

冬空や触腕長き烏賊を釣る

大石高典

礼拝へ白のセーター新しく

福江ちえり

餅搗の臼に湯気立つ香り立つ

田中 勝

正月の凧や鉄橋ゆく列車

碓氷芳雄

鼓の音肅々として能始

國兼弓華

年越すや青空に魂返したり

原 順子

虎落笛寝つけぬときの部屋広し

小堀尚美

マホガニーのピアノ遺せし冬館

富沢壽勇

氷華集

2025年2月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

乾眠するとや熊虫に空つ風

朝田玲子

チャート層剥き出しの崖山粧ふ

齋藤亜矢

冬ぬくしひと間に過ぐす赴任先

有岡萃生

蓮根の十個の穴に十の謎

谷口文子

けふ無事にあること蕪の丸きこと

鈴木大輔

後継がずと言ひ捨つる子よ柿赤し

河村純子

托鉢の来ること谷戸の名の木枯る

片岡和子

葬列や鳥の渡りを追ふやうに

福のり子

煤迷の口実いまや尽きかけて

城戸崎雅崇

子を傘へ父は濡れ身の初時雨

中島冬子

風邪籠る三日ミイラとなる思ひ

大石高典

立冬や紺ひと筋の水平線

福江ちえり

樹より樹へ鳥の突き抜け暮の秋

加藤 剛

閑かなり寄するも引くも秋の潮

津嘉山典

冬鷗群れ来るときや能登の海

中井昭雄

秋あかね刈り揃へたる小柴垣

牧田満知子

鳩笛は日暮の音色暮の秋

片山旭星

被爆地の冬の灯し火平和賞

田中 勝

鋏のおと等間隔の冴ゆる朝

碓氷芳雄

氷室集

真ん前は闇の岬や星流る

加藤広文

風の棲む島や冬木の曲り立つ

片岡和子

虚子文学館その先の秋の浜

宮坂美緒

なほ残る渋谷の路地や石路の花

朝田玲子

月満ちて杜に暗がり生まれけり

田中白秋

小春風ひねもす磯に根魚釣る

牧田満知子

白足袋に足の冷たし能役者

河村純子

いたづらに明るき駅舎冬の暮

大石高典

鉄塔を等間隔に山眠る

有岡萃生

駆け降りる影と縋るる落葉山

鈴木大輔

間に合はぬ夜となりにけり冬支度

加藤 剛

栗踏めば縄文のこゑ聴へたり

津嘉山典

夜神楽へ面を掛けたり控室

丹羽康夫

祖母の縫ひし綿子の重さ懐しく

石上敦子

機関士一筋勤労感謝の日

山本京子

手の甲の少しひりひり冬初め

谷口文子

隆起せし奇岩に冬の落暉かな

柳堀悦子

懸崖菊百の手遣ふ菊師かな

高松房子

菰卷や庭師の太き無骨の手

幸城麗子

円空の墓つづまやか木の葉散る

小堀恭子

氷華集

2025年1月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

十六夜の火山湖に跳ね魚の音

齋藤亜矢

秋霖や椅子にたれかのゐし温み

朝田玲子

閑けさや樹海の底へ落葉道

伊東弥生

街道の先より暮れし曼珠沙華

有岡萃生

書き込みの多き本読む源義忌

河村純子

秋風や透きとほりゆく大伽藍

田中白秋

踏み鳴らすは秋の天狗や能舞台

谷口文子

茶畑の敵とばかりに零余子採る

中島冬子

名月を背伸びして見る心地かな

加藤 剛

揺るるものばかりを揺らし秋の風

鈴木大輔

移住とて移民のごとし十三夜

片岡和子

献杯の後に間のあり秋の暮

佐藤慎一

野葡萄の触るるばかりや杣の道

牧田満知子

影踏みに大人が興じ後の月

福江ちえり

つちのこや腹に重たき夜食摂る

大石高典

年縞に気候変動知る秋気

津嘉山典

道なりの等々力溪谷照紅葉

富沢壽勇

白樺や音無き道の秋のいろ

田中 勝

子へ宛名書く小包や柿の秋

碓氷芳雄

氷室集

角切られ安堵のやうに鹿の去る

河村純子

かけつこに負けて山盛り栗ごはん

谷口文子

酔ふ友の姿はじめて星月夜

宮坂美緒

妻帰るまではひとつの秋灯

鈴木大輔

馬追や句点の如く本の上

加藤広文

毒茸を齧りて学ぶことの有り

大石高典

太蔓にてこずる夜長簞を編む

伊東弥生

初鴨の水尾寄り添うて水月湖

柳堀悦子

悪役の顔して林檎齧りけり

有岡萃生

庭石のいろの覚めゆく秋の雨

朝田玲子

雁や風吹き渡る三方五湖

加藤 剛

かやぶきの風に揺れゐる蕎麦の花

田中白秋

菊脰苦手な子らはコロツケに

宮坂千種

錦秋や五湖それぞれの色を持ち

田辺美千代

絶景をもて遊ぶがに霧時雨

津嘉山典

若狭より粕漬の着く秋日和

牧田満知子

桐は実に風の育てる波頭

片岡和子

秋色の切絵めくなり北の国

田中勝

秋ぐもり湖面のごとき若狭湾

城戸崎雅崇

ふぞろひの有りの実ふたつ御裾分

幸城麗子